

卒業する、いま

新しい一步を踏み出す人、仲間を送り出す人——
幼稚園から大学のみなさんに、今の想いを聞きました。

教育人間科学部心理学科4年

齋藤詩音

善い計画

私の大学4年間は神様の導きを強く感じた4年間でした。

キリスト教推薦で青山学院大学に入学し、青山キリスト教学生会（ACF）に所属し、多くの仲間と時間を過ごす中で神様の偉大さと愛の大きさを知りました。人が好きで友達と会ったり遊んだりすることを楽しみにしていた私にとって、コロナで友達と会えず思い描いていた学生生活が送れなかったことは相当なストレスでしたし、“神様なんでええ”と嘆きたくなることもありました。しかし、そのような中でも神様はその苦難を乗り越えられる仲間と環境を与えてくださいました。一つ一つの選択や苦難が、全て用意された計画の過程であり、私が成長するために必要なことでした。

これから社会人になり、新しい環境に行くことは正直不安でいっぱいですが、私のこれからの道も全て神様によって備えられていることを信じ、歩んでいきたいです。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」（エレミヤ書29:11、新共同訳）



高等部教諭 平野武士

信じて生きる

コロナ禍にあったため6月に入学式を行い、見通しのたたない中を手探りで進んでいった3年間。

今までの多くの卒業生が当たり前であった日常が送れませんでした。PS講堂に毎日集い賛美歌を歌い、奨励を聴き、頌栄を歌うという日常が今でも難しい状況です。そのような状況でも、高等部生活で多くの「み言葉」に触れ、勇気づけられたのではないかと思います。

生きるためには力強い「み言葉」によるメッセージが必要です。その「み言葉」があるから、今を生きられ、前に進めます。勇気づけられた心は、目に見えない何者かに護られた自分を信じさせてくれます。「これから自分が進む道」を護られていることを信じて力強く生きていけるように心から祈っています。



3年 坂本 滢

支えられた

高等部生活に感謝

私たちの学年は入学式を行わないままオンラインで授業が開始され、外部生の私は孤独感に苛まれました。

新しい環境に順応するのが苦手な私にとって、このような高校生活の始まりはより一層辛いものでした。

登校が徐々に始まっても学校に通う意義が見出せず極限の精神状態で過ごしていました。そこで出会ったのが「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。」(マタイ7:7)という聴き馴染みのある聖句です。

その聖句に感化され、状況を能動的に変えるしかないとオルガン部と美術部に所属し、2年次には文化委員長として生徒会活動に携わるようになりました。

両部活の幹部と生徒会活動、勉強を両立することは非常に困難で、ときには体調管理が行き届かないこともありました。度々挫折しそうになりましたが多くの友人や先生方の支えで乗り越えることができました。ですが、隣人を愛せよ、の教えのもと、高等部で出会った支え合う人々に救われました。

私を暗闇の中から救ってくれるのは聖書や礼拝だったなと高等部生活を振り返って感じています。



中等部教諭 竹内 隆太郎

「絶えず祈りなさい」

(テサロニケの信徒への手紙 ― 5章12～18節)

日曜日の試合前、ラグビー部では仲間が集まって「お祈り」の時間を持ちます。静かに目を閉じて「神様」と語りかけるとき、亡くなった祖父母や父の顔が心に思い浮かび「がんばれ」と応援してくれているような気持ちになることがあります。

神様へ感謝の言葉を探していると「嬉しい事」が頭のなかにひろがっていきます。楽しみにしてきた試合ができること・仲間が集えたこと・相手がいること……、試合を支えてくれる人への感謝の気持ちがひろがっていきます。

「心折れることなく戦い抜くことができますように」

「大きな怪我人が出ませんように」

「ここに集えなかった仲間にも我々以上のお恵みが与えられますように」と神様にお願いをします。部員が続けてお祈りをしてくれます。

「アーメン」でお祈りが終わり目を開けて仲間の顔をみると、不安や不満に飲み込まれていた心の曇りが晴れていくのを感じます。自らの弱さに立ち向かう「勇気」が与えられたように感じます。試合に向け、楽しみな気持ちに心が満たされていきます。

みんなとの大切な時間です。これからも大切にしたい時間です。

ONE FOR ALL, ALL FOR ONE



後列右端：竹内隆太郎、
前列中央：岩崎雄太



3年 岩崎雄太

One for all ―タラントを誰かの為に

(マタイによる福音書 25章14～30節)

僕はラグビー部に入っています。ラグビーのイメージを人に聞くと体格の良い人が多い、転んで痛そう、チームプレーのスポーツ等と言われますがラグビーを続けていると単純にぶつかり合うだけのスポーツでは無いと思うようになりました。

日本ラグビーフットボール協会はラグビー憲章で「品位・情熱・結束・規律・尊重」をコアバリューと示しています。互いに激しくぶつかり合うスポーツの為にルールを守る。感情的な行動を取らず、チームメイト、先生、監督やコーチ、保護者に支えられている事への感謝。相手チームへのリスペクト。これらを大切にします。勝負の結果に気持ちが揺れたり、練習を休みたいと思う事もあります。

でも気持ちを優先せず、自分のできる事で他者の為になる事があるとラグビーから学びました。そしてそれは普段の学校生活や家でも同じだとこの3年間を通して思うようになりました。実際には自分の気持ちを優先してしまう事も多く、これから神様から与えられた僕のタラントを誰かの為に使えるような努力や、「One for all」の気持ちを行動に移せるようにしたいです。

左:佐々木淳、右:川村直央



初等部教諭 佐々木 淳

「地の塩・世の光」で、^あ在り続けよう

6年の間にたくさんの学びと成長がありましたね。新型コロナウイルスの流行やウクライナでの戦争など社会的に大きな出来事もありました。その中で、初等部にいたからこそ学べたことは何だったでしょう。米山梅吉先生の「人にされて嬉しかったことを人にもせよ」のお話やそれをもとにできた初等部の「5つのお約束」、学院のスクールモットーの「地の塩・世の光」、サーバント・リーダーという人のあるべき姿、つまり、青山学院が一番大事にしているキリスト教の教えや考え方が、今すでにみなさんの心の中にはしっかりと根付いているのだと思います。これからの人生の中で、自分のことだけを追い求めるのではなく、仲間や隣人のことも大切にし、ともに歩む心を持ち続けて大きく羽ばたいてほしいと願っています。

最後の2年間をすてきな6年生のみなさんと一緒に過ごせたことを心から感謝し、これからのみなさんの上に神さまの恵みが豊かにあるように祈っています。

「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かせなさい。」

(マタイ5:16)

6年 川村直央

卒業するいま

僕は5年生の時にふと「洗礼を受けてみたいな」と思い、その思いに突き動かされるように受洗をしました。受洗をしてからは毎日の礼拝のお話を聞いて、もう一度自分自身で考え直すようになりました。それによってお話が単なる先生のお話としてではなく自分の事として、頭の中に入って生活に繋がられるようになりました。

僕は3年生からラグビー部でした。ラグビーを続けているなかで「楽苦美」の意味と「One for all, All for one」の大切さがわかりキャプテンになりたいと思いました。

6年生の1学期、僕はラグビー部のキャプテンになりました。キャプテンになってからは「人にしてもらいたいことは何でも人にしなさい」という聖句を思いながら、下級生にもっとラグビーを楽しんでもらうためになるべく優しく振る舞ったり、練習の準備を早めに行ったりと色々な事をしました。

下級生が楽しそうにラグビーをしているのを見て「下級生の為に神様は僕をつかわしてくださったんだな」と思いました。



幼稚園保護者会会長 佐藤 藍

神様を信じ、 祈りがあるなかで

新型コロナウイルス流行初期の入園から、数々の休園を乗り越え、一日一日大切に歩み続けた三年間があったという間に経ちました。

年少時代、自分がやりたいと思った工作に無我夢中で取り組み、時には先生やお友だちの力を借りながら、作り上げる喜びを大いに感じ、疲れ果てるまで遊びました。年中時代、遊びの行き先々で会えるお友だちは、学年を越えて仲良くなりました。やがて年長になり、軽井沢キャンプ、運動会のリレー、クリスマスページェントで大切な役目を務め、お友だちとの結束力が次第に高まっていきました。

一人でやりたいという年少から、年中、年長を経て、皆で成し遂げたいという心の成長を逞しく感じました。これも、神様を信じ祈りがある中で、温かな先生方の見守り、お友だちの存在、そして保護者の皆様が一丸となって子ども達を育みましょうというご協力のもと、心豊かな幼稚園生活を送る事ができました。

休園や行事が行えなかった日々から、少しずつ幼稚園本来の姿へ戻っていく様子を見届ける事ができ、行事の有り難さにも触れ、お支えくださった全ての皆様へ感謝申し上げます。



右:岡林亜季、
左:橋本治奈



幼稚園教諭 岡林亜季、橋本治奈

いつも神様とともに

卒園が近づいてきた子どもたちと神さまのことを話していると…「神さまって光みたいに僕たちのことをいつでも包んで守ってくださる人だと思う」「神さまのお話は何度聞いても面白い。神さまが人間をつくったって聞いたときは、やっぱりこんなことは神さまにしかできないはずだなって思ったよ」「お祈りするといつもほっとするの」「神さまは私のこと大好きなんですよ。私も神さまとイエスさまが大好き！ イエスさまに会えたらいいのにな」と神さまへの想いが次々と溢れ出ていました。この子どもたちの姿から、これまでの幼稚園生活を通して、神さまへの信仰が培われて、神さまの子どもとして大きくなったことを嬉しく感じました。

嬉しいときも悲しいときも、神さまはいつでも傍にいて守ってくださいますから、これからも神さまに祈りながら、安心して過ごしていられることを願っています。幼稚園の先生たちはいつでも皆さんのことを待っていますから、困ったり悩んだりしたときには会いに来てくださいね。ご卒園おめでとうございます。